

小夜衣

常磐津

全詞章

常磐津

河竹新七

述

本名題『恨葛露濡衣』

作曲者・初演年不詳

引四つに、月夜の里も恋の闇、忍び郭を遠近の、一目堤を横切て、手に手を取りて二人連濡る露の露ならで、心置く身は雨空に、乱れて渡る雁さへも、若し追手かと驚かれ、慄ふ足もと音を忍ぶ、秋の蛙の声かれて、田川の水の浅き緑、死ぬる覚悟も頼故に、歩み兼てぞ立休らひアイタ、ゝゝ、

モシどうぞなさんしたかいなア

掟厳しい廊を抜け、ヤレ嬉しやと思ふたら、心のゆるみに持病の癪がアイタ、ゝゝ、こりや困つたもので御座んすが、何ぞ業は御座んせぬかいな

死うと覚悟極めし故、業を飲むにも及ばねど、せめて二人が死所と定めし、小梅の菩提所までどうぞ早う行きたいものだが、行くに行かれぬ此のさし返さうして此処等に斯して居たら、追手の若に捕へられ、如何なる憂目に逢ふも知ず

小梅まで行かれずば、何処で死ぬのも同じ事

爰を二人が死所に、果敢なく消る土堤の露

秋の夜長に引換て、契り短き身の上は西へ傾く月代を

よすがとなして冥世の旅

今更言も愚痴ながら

そも突出しの其日より、郭馴れぬ身に染みじみと、惚て起請の書様も、弄られながら朋輩に、聞いて書く夜の墨の色、薄き契りに今日の今筆の命大切果てて、硯の海の姉さんに、恩も送らず死るのは、皆定まる約束と、思ふて早う殺してと

言ふに此方も苦しさこらへ、そりや我とても父母へ、孝も尽さで今死なば、歎きをかける不孝の罪、お託は草葉の陰よりと、しぼる秋の露時雨

鐘の音しづむ真夜中に、往来も稀なそゝり節

二寸切れて居続けさんせ、雨の降るのに帰さりよか

今大門で話を聞けば、丁子屋の小夜衣は、欠落をしたと言事だが、千太郎が連出したか、おいつア俺も掛り合だ、聞捨てにやアならねへはへ

ト言ふ声聞いて兩人が逃んとするを透し見て

や其処に居るのは小夜衣千太郎か

エ、

いゝ所で見付たわへ

モシどうぞ見逃して下さいませ

どうして是が見逃せるものか、外の者なら知ねへこと、俺が判の這入つて居る小夜衣、連出されてたまるものか、二人共丁子屋へ、そびいて行くから覚悟しろ

モシ三治さん、御尤もでは御座りますすが、添に添れぬ身の上に、死ぬる覚悟で廊から、連て逃たる此小夜衣

見ず知ずと言ふではなし、廻町のおさんと兄弟分のお前故、知ぬ顔して此儘にどうぞ見逃して下さいませ

イヤあんまり呆れて物が言へねへ、大金を出して抱へた小夜衣、死れて見る足損だ、其祟は判方の長庵と俺が難義、見逃すどころか二人共

そんならどうも此儘に、見逃しては下さんせぬか

知た事だサアサアきりと、うしやアがれ

小腕こつて引立る、やらじと縄の千太郎、是まア待つてと小夜衣が、とめるもかよき女郎花、情嵐の一吹に、折て倒るゝ萩芒、跡白露と行先は

又一吹の小夜風に、雨雲はこぶ秋の空、かはる習ひの男気も、変らぬ忠義久八が、只一筋に歩み来て

宵に土堤で若旦那を見かけた故に跡をつけ、仲の町までいて見れば、女郎が先待居て、うつゝ他愛もない有様、直に踏込御意見せうとは思ふたが、満座の中で若いお方に、恥をかゝすも

本意ならねへ、帰りを待て此土堤を、宵から幾度行たり来たり、只さへ長い秋の夜に、待るゝ身より待身の譬、今うつたのはアリヤバつかしらぬ

小川にかゝる橋の名の、神ならぬ身にそれども、知でつまづく縁のはし

是は是は何れのお方で御座りまする、真平御免下さりませ、と立寄つて、ハテナアこの往來に今時分、寝て居らるるは生酔か、ヤ息つかいの塩梅は、どうやら病に困む様子、モシどうぞなされましたか

雲間を出る月の影

ヤア若旦那でござりますか

コレ小夜衣はやらぬやらぬ

モシ氣を確然とお持なされませ

やさういふ声は

久八で御座ります

エ、ヲ、其方は久八、ア、面目ない

面目なやと退出すを、引戻してつれづれと、涙持つ目に顔うち見やり

モシ若旦那、此久八の顔を見て、逃る様なお身持には、何でおなりなされました

エ、

エ、お前さまはなア

今更言ふに及ばねど、お前様は私がお世話申して御養子に、お出なされし御身故、一方ならず思へばこそ、五十両の短刀も、此身に罪を引受て、十二の年から勤めたる、お内を不首尾に出しましたも、悪いお名をつけない為、伊勢五の内の番頭は、見かけによらぬ不埒者、紙屑買で歩くのは、心柄ぢやと人さまに、芥のやうに言ゝとも

お前さまさ、御辛棒にて、御家督相続なさるれば、尽せし忠義も現はれて、又元々の主従に、ならませうと夫れのみを、朝夕願ふ甲斐もなく、コレ此様なお身持では、アノ物堅いお内故、翌とも知ず

御離縁に、おなりなさるは知たこと、さうなる時は富沢町の御両親様へ、私が何と言訳がなりませう、何ぼお若いお心でも、よもや再び廊へは、お出なされぬ事とのみ、思ひましたは田舎氣質、正直すぎたが今では後悔、ようも誑して下さりましたな

其恨みは心もちやが、さらさら誑す偽るのと、そんな心は微塵もない、色に迷ひし若氣の誤り、久八其方へ言訳此場に於て

さしたる一腰抜より早く、既に斯よと見へれば

エ、滅相な事なされますな、お前様に命を捨てさせ、此久八が悦びませうか、誠のお人にしたいばつかり、夜の日も寐ずにまごまごと、蚊にせゝられて此土堤を、幾度歩くか知ませぬ、今お前さまに

死れたら、是まで尽した忠義も水、短氣な事して下さいますな

イヤイヤわしは其方に達すとも、今宵は死ぬる覚悟の身の上

エソリヤマア如何なる訳あつて

サア是迄隠して使ふたる、金のたゝまり二つには、如何なる前世の悪縁か、思ひ切れぬアノ小夜衣、所詮此世で添れねば、心中せうと覚悟を極め

これ此様に書置まで、互ひに持て郭をぬけ、爰まで首尾よく逃のびしが

思ひがけなく手櫛の三治に見咎められて、小夜衣を引戻されるをやるまいと、争ふ途端に脚腹をうたれ、氣を失ふて跡知ねど、翌はこの身の大事となれば、せめて其方へ言訳に、爰に死ぬのがまだしも

仕合、どうぞ留すゝ死なしてても

知ぬ先は是非もないが、此久八の目にかゝり、何んであなたが殺されませう

それぢやと言て生ては居られぬ、此手を放して呉やいの

イエイエ滅多に離しは致しませぬ

とめる途端に久八が、持たる刃、割つて

モシ若旦那どうぞなされましたか

イヤイヤ案じるな、どうもしせぬしはせぬ

や五音の調子呼吸の狂ひは、コリヤ誤つて若旦那を、ヤゝゝゝゝ、

呆れて膝はわなわなと、目もくれないの草紅葉

モシ若旦那、お氣を確かにお持なされませ、あなたにお怪我をさせまいと、とめる途端にあやまつて、ひよんな事を致しました、こりやどうしたらよからうナ

苦しむ手負を介抱なし